

第5回目 第4章アフター・クリスダム (キリスト教世界の終焉後) 2014年8月9(土)

宣教と征服を通して、クリスダム体制は世界中に輸出された。クリスダム時代の中で再洗礼派や分離運動が異議を唱え、クリスダムを拒絶した。彼らには異端の烙印が押され、聖なるキリスト社会 (クリスダム!) を脅かすとして迫害された。

第三の中核概念

クリスダムに肯定的な貢献がなかったわけではないが、クリスダムは福音を深刻に歪め、イエスを蚊帳の外に置き、地域教会をあらゆる面で弱体化させ、ポスト・クリスダムに対応できなくさせてしまった。→クリスダムを拒否し、それに代わる考え方や行動を追求した諸運動から学ぼう!

<クリスダムとは何だったのか>

定義:

- *ある地理的な領域のその中で、ほぼ全員が少なくとも名目上クリスチャンとされた。
- *歴史の時代区分のひとつ (紀元4世紀のコンスタンティヌス帝による改宗~20世紀後半に至るまで)
- *ひとつの文明 (キリスト教が決定的役割を果たした)
- *一種の政治協定 (教会と国家が相互に支援を提供し、正当性を認め合った)
- *この世界における神の働きについての一つの思考様式 (イデオロギー)

歴史:

- *コンスタンティヌスの改宗に端を発し、キリスト教がローマの国教に。(他の宗教は抑圧された。ユダヤ人だけは強固な反体制派)
- *十字軍によって、征服した民衆にはキリスト教信仰と文化が押し付けられた(紀元1000年までには、ほぼ全ヨーロッパがクリスダムに)。
- *中世の絶頂期(富を増大させて強力に。あらゆる分野にキリスト教のテーマや価値観が取り上げられて、独自の文明を構築。一生の節目をキリスト教儀式で。)
- *15世紀から16世紀にかけて、アメリカ両大陸を征服し、ヨーロッパ文化を輸出。自分たちのキリスト教文化が他の文化よりもすぐれていると考え、それを新たな改宗者に押し付けた。
- *宗教改革…クリスダムの分断→ミニ・クリスダム(ルター派、改革派、カルヴァン主義、カトリック、聖公会など) ←クリスダム崩壊の種まき
- *百年に亘る宗教戦争…ミニ・クリスダム同士の戦い クリスダムの崩壊
- *啓蒙主義(18世紀) 自由教会の台頭
- *20世紀(クリスダムの崩壊…キリスト教や教会について無知な人々が溢れている) クリスダム世界を生きてきた人々の戸惑い(「キリストの弟子」であることの意味

は？ 教会をどうするか？ 世俗主義と競合する中での宣教とは？)

聖なる社会という概念：

- ・宗教と政治、公生活と私生活、教会と国家が完全に組み合わされていた（クリスンダムは聖俗の区別なし）。
- ・教会と国家の強力な協力関係（癒着）…生み出したもの→残忍な文明（宗教裁判、拷問、魔女狩り、十分の一税（教会税）、戦争、強制洗礼、十字軍遠征など）
- ・福音を擁護しているつもりで福音を歪めた。

アナバプテストのクリスチャンにとって：

- ・クリスンダムはキリスト教の真実な姿ではなかった。
- ・本物の信仰と弟子道が真価を発揮するのは、①信じないという自由があるところ
②信じなくても社会制裁の対象にならない—すなわち真の意味での自由のあるところ

<ポスト・クリスンダムとは何か>

- *新興している文化のこと。西洋社会で形造られたキリスト教信仰が統合力を失い、制度や機構の影響力が衰退。
- *中心から辺境へ
- *多数派から少数派へ
- *定住者から寄留者へ
- *特権階級から数ある中の一つへ
- *支配から証しへ
- *現状維持から宣教へ
- *制度から運動へ

◎ポスト・クリスンダムへの反応・・・もう一度クリスンダムを作り直せる？—ありえない。

◎神がポスト・クリスンダムを造り出しておられるなら、神の意図は？

- *クリスンダムによって歪められた福音を正しく理解し直して、クリスンダムが疎外したイエスに改めて会うことができるように。
- *ポスト・クリスンダムの状況とイスラエルのバビロン捕囚との対比
 - ・バビロン捕囚を経て、イスラエルはどう変化したか。
 - ① 神を理解する枠組みが大きく広がった。
 - ② 偶像の問題に決着がついた。
 - ③ シナゴグ（会堂）の発展→宗教生活の改革→初代教会に影響を与えた。
- *ポスト・クリスンダムの意味するところ
捕囚後のイスラエルに与えられたような、同じような変革の力、自由への開放を実現する力、先を見通す力が備えられるためか。

再洗礼派の伝統がポスト・クリスダムに提供できるもの

*クリスダムへの批判の部分

- ① 悔い改めの呼び掛け
- ② イデオロギーに関する警告
- ③ デトックス（解毒）への挑戦
- ④ 脱却の姿勢

*ポスト・クリスダムへの良き贈り物の部分

- ① 分離派の実践
- ② 思いがけない見識
- ③ 境界の経験
- ④ 平和的な証し
- ⑤ イエスの中心性

第四の中核概念

貧困者、社会的弱者、被迫害者にとって良き知らせとなる弟子道は、反発を招き、苦難を伴い、殉教をも覚悟する。

<クリスダムとは癒着を意味した>

- ・クリスダム時代の遺物…地位、富、権力との癒着を象徴する大聖堂など
- ・十分の一税…ルカ 4：18～20 に反する
- ・戦争、十字軍、処刑、拷問、宗教裁判、迫害など…「敵を愛する」イエスの教えと対立
- ・教会の墮落
- ・教会は地位、富、権力を失った…悔い改めの結果ではない

<ポスト・クリスダムがもたらす好機>

- ・中心から境界へ（下から上へ…神の宣教の特徴）
- ・多数派から少数派へ…預言的使命の回復
- ・定住者から寄留者へ
- ・特権階級から数ある中の一つへ
- ・支配から証しへ（本来の召命——福音を証しする）

<学ぶことと探求すること>

*「アーバン・エクスプレッション」という名の運動の2つの中核責務

- ① 境界や隙間で神に従うことを責務とし、神の働きを力なき人々の間や弱さを抱える場所で発見しようとする。
- ② 無条件の奉仕を責務とし、全人的なミニストリー、貧しい人たちの優先、声なき声に。

*「SPEAK」の心髄…声なき者の声となる

弟子道は苦痛、困難、迫害を伴い、殉教に至ることもあった。（Ⅱテモテ 3：12）

クリスダム体制はキリスト教に反するものであり、迫害を続ける国家教会は本物のキリスト者ではありえなかった。

「迫害」を勘違いしてはいけない。

「私たちはどうして迫害されていないのか」…迫害される価値がない(?) これこそ由々しき問題である。